



『ともだちのときちゃん』大賞

ちがうっておもしろい

3年 T・Aくん

ぼくはこの物語を読んで、はん長のことを思い出した。

ぼくが一年生の時、六年生のりん君が登校はん長だった。ぼくは、はん長のすぐ後について歩いた。はん長はよく話しかけてくれた。鳥を飼っている話もあった。毎朝、鳥小屋のそとじをして、水やえさをやって学校へ来るそうだ。ぼくは、鳥のフンはくさいだろうし、一日もわすれずに水やえさをやるなんてめんどうだ。鳥より犬の方がかわいいのと思った。

ときちゃんがありをむちゅつで見ているのと同じ。ぼくは、ありの角がピンとしているなんて知らない。でも、今に見てみよう。ぼくは早く学校へ行きたいのにはん長は出るのがよい。リーダーなのにはよりないなあ。鳥の世話なんかしているからだ。

ときちゃんも、のんびりしている。さつさつすれば、いっほい遊んだりできるのにな。

ある朝、ぼくは集合場所で、わすれ物に気がついた。「どうしよう。」「と」と言つとはん長が、「取りに帰ればいいよ。」「と言つた。みんなおいつこうと走って行くと、みんなは、まだ集合場所にいた。はん長が、ぼくを見て「じゃあ行こうか。」「と言つた。みんなもいっしょに歩き出した。

学校に着いたのは、ぼくたちのはんがビリだった。でも、だれももんくを言わなかった。

学校では、ぼくはリーダーで休み時間の遊びを決めなくてはいけない。でも、友だちから「めいれいしないで。」「ともんくを言われることがある。

ときちゃんはサンマを見て、海のことを思つたり、木を見て根つこのことを思つたり、見えないことも考える。

ぼくのはん長も、見えないことを考えている気がする。

さい後に、さつきちゃんが、「ときちゃんと友だちでよかった。」「と言つていた。その時、はん長がりん君でよかったと思つた。